

アルコール摂取、加齢と運転

自動車安全運転センター 大塚 博保

1 飲酒と運転

(1) 飲酒運転の現況

a 交通事故と飲酒運転：道路交通法第65条では、何人も酒気を帯びて運転してはならないとしている。厳しい飲酒運転禁止条項の存在、飲酒運転抑止への活動が功を奏しているためか、交通死亡事故の中に飲酒運転が占める割合は、わが国では15.7%程度である。

しかし、平成3年中には飲酒運転で検挙された者が全取締件数の3.6%、337,140名、酒酔い運転で交通事故を起こした者が全交通事故中0.5%、2,939名おり、飲酒の上での運転はあとを絶たない。

b 死亡事故発生における飲酒運転の位置付け：死亡事故発生原因は、最高速度違反が最も多く、ついで脇見運転、漫然運転、運転操作不適、そして第5位が酒酔い運転で酒酔いが主要な位置を占めている。

c 飲酒の程度と死亡事故惹起率：飲酒運転によって発生した死亡事故のうち、46%が酒酔い、40%が酒気帯び、14%が酒気帯び基準以下であった。酒酔い状態は死亡事故に大きい位置を占めている。

d 飲酒運転者の実態：付き合い、飲みたくてが約6割。飲酒量が少ない、醒めた、大丈夫と思った、翌日の出勤に困る、近距離だからなどの理由が8割。飲酒後2時間以内が約6割。交通違反前歴者が約6割（一般には約4割）、そのうち25.6%が飲酒前歴者。

(2) 飲酒による行動、機能の変容

a 理性の崩壊：高級な道徳感情が鈍麻し、無遠慮となり、行動は粗暴となり、過失多く、注意集中困難となり、理解は悪く、記憶力減退する（上野正吉氏）。

b 典型的一症例：28歳の健康な男性について飲酒による行動の変容状況を調べてみた。北川式飲酒検知器による呼気中アルコール濃度は自己評価で、いい気持ちまで飲んだ時0.54mg/lであった。しらふのとき筋肉反応動作の速さが0.38秒、50試行中誤反応数4個、弛緩反応数0個であったものがそれぞれ0.40秒、12個、4

個となり、飲酒により反応動作の速さはそれほど遅延していないものの、認知・判断機能及び適度な精神緊張の維持が極めて低下する。また直立身体動揺も大きくなり、眼球追従動作の円滑性も低下している。

2 加齢と運転

(1) 高齢運転者の事故

自動車は高齢者の行動を補充し、活動領域を拡大してくれる好適な用具である。全運転免許保有者に占める65歳以上の割合は昭和45年2,645万人中21.4万人、0.8%であったものが、平成3年には6,255万人中316万人、5.1%と急激な増加を示し、平成22年には14万人を超え、13.7%を占めると予測されている。

高齢運転者が起こす交通事故は、25歳～64歳の千人対事故惹起率8.3件に対し、65歳以上7.5件で決して多くはないものの、10万人対事故死者率は25～64歳の5.5人に対し、65歳以上19.2人と極めて高い。高齢運転者の増加は、単に事故発生数の増加にとどまらず事故死者数の増加となる。

(2) 高齢運転者の動作、行動機能

a 反応の遅延：筋肉の反応の速さは、20代の0.24秒に対し60代は0.27秒で対20代0.03秒、1.13倍、70代は0.30秒で対20代0.06秒、1.25倍程度の遅延である。

b 認知、判断機能の低下：誤反応は20代の50試行中0.9個に対し、60代は2.3個で2.6倍、70代は2.7個で3.0倍と大きい機能低下が見られる。

c 弛緩反応の増大：0.39秒以上の反応値の出現は30試行中20代の0.44個に対し、60代は1.47個で3.34倍、70代は3.07個で6.98倍と高齢者には弛緩・ぼんやり反応の出現頻度が極めて高くなっている。

d 安全態度の若返り：安全運転への意識、態度は、一般に若年者に欠如したものが多く、年齢が増すにつれて良好となるが、50代を最も良好として、60代からは再び欠如した者が増える。それは排他的態度において顕著に示されている。